

日吉台地下壕保存の会会報

第94号

日吉台地下壕保存の会

第17回 川崎・横浜 平和のための戦争展

実施要項

1、趣旨および経緯

1992年12月、私たちは第1回川崎・横浜 平和のための戦争展を、ここ川崎市平和館で開催しました。登戸研究所・蟹ヶ谷通信隊地下壕・日吉台地下壕の、調査研究と見学案内を別々に行っている団体と個人が実行委員会をつくり、多くの人に、これらの戦争遺跡の存在を知ってもらい、保存活用の道を見つけるためでした。今も稀少ですが、17年前は「平和館」と名づけられた施設をもつ地方自治体は川崎市くらいで、しかも実行委員会には市職員が2名加わり、公民一体となっての画期的ともいえる「平和」を推進する事業を始めました。開催地は川崎と横浜の一年交代ですが、川崎の場合は、毎回平和館で行っています。私たちの企画に一番ふさわしいと思われるからです。そして川崎市は一貫して「後援」という形で、応援してくれています。

横浜では、大倉山記念館(第2回)や、かながわ県民センター(第4・6回)でも行いました。第8回は長年の夢であった、慶應大学日吉キャンパス藤山記念館での開催となり、慶應構内で実施できたことは、大変な飛躍でした。その後日吉台地下壕保存の会が、慶應義塾のある研究プロジェクトの一員となったので、その一環として3年連続(10・11・12回)日吉キャンパス来往舎を会場に、「戦時下の大学」に焦点をあてた特別展を開催し、大きな反響がありました。

私たちが保存活用の活動に関わっている登戸研究所・日吉台地下壕・蟹ヶ谷通信隊地下壕は、その規模と意味合いにおいて、全国でも屈指の戦争遺跡とみなされています。文化庁としても重視していることは、すでに明らかにされています。慶應大学に海軍がはいった日吉台地下壕と、そのあと地に明治大学がきた登戸研究所とでは、経緯は異なりますが、両遺跡とも、日本有数の私立大学内にあることは共通しています。また、そのことが破壊を最小限に止めてきたことは、疑いようのないことでしょう。

最高学府である大学は、学問の研究と教育の場であり、近年「地域の教育と文化の発信地」としての役割が特に重視されています。その観点からみると、最近両遺跡の見学が急増し、特に小学生から大学生や一般市民の平和教育に、最適の地と認識されはじめたことは、自然な流れといえます。日吉台地下壕には、近隣の小中高校だけではなく、修学旅行として見学に来る中学校もありますし、様々な大学の見学もふえています。

2010年春、明治大学が登戸研究所であった建物を、そのままに近い形で残し、「明治大学平和教育登戸研究所資料館」として一般公開することは、戦跡保存運動にとっても、大学

にとっても歴史的なことではないでしょうか。慶應大学はじめ、戦争の跡が残されている大学は少なくありません。それをどう扱うかは、大学だけではなく、市民の課題であるといえましょう。私たちは、今年のテーマを「戦争遺跡を地域の文化財に」と決めました。今年は、従来の展示やシンポジウムと若者の発表のほかに、5日13時から舞台と客席一体となり、平和なればこそその歌をうたいます。皆さまのご来場お待ちしています。

2、テーマ

《 戦争遺跡を地域の文化財に 》
——私の街から戦争が見える——

3、主催・後援・実施団体

主 催 川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会
後 援 川崎市
実施団体 旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会
日吉台地下壕保存の会
蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会

4、代 表 姫田 光義 旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会協同代表
中央大学名誉教授

副代表 大西 章 日吉台地下壕保存の会会長・慶應義塾高等学校教員
新井 摥博 戦争遺跡全国ネットワーク運営委員
(蟹ヶ谷通信隊地下壕保存の会代表・日吉台地下壕保存の会副会長)
渡辺 賢二 明治大学講師
顧 問 白井 厚 慶應義塾大学名誉教授
須田輪太郎 国際人形劇連盟名誉会員

5、開催日程 2009年12月5日(土)・6日(日) 9時～16時 入場無料

6、会 場 川崎市平和館(東横線元住吉徒歩7分) 044-433-0171

7、内 容

○展示 12月5日～6日 9時～16時

戦争遺跡の写真・実物資料・市民の描いた戦争の記憶・小池 汪写真展 他

○文化行事 12月5日 「くちびるに歌を 心に平和を」 13時～15時

○若者の発表・シンポジウム 12月6日

若者の発表「戦争の記憶をどうひきつぐか」 10時～12時

○シンポジウム「戦争遺跡をいかす平和ミュージアム」 13時～15時30分

パネリスト 姫田光義 中央大学名誉教授・山田朗 明治大学教授

新井撠博 戦争遺跡全国ネットワーク運営委員

8、関連行事 日吉台地下壕見学会 9月26日(土)

多摩丘陵の戦争遺跡を訪ねるバスツアー 10月25日(日)

明治大学平和教育登戸研究所資料館内覧会 11月22・23日(日・月)

9、運 営 実施団体で実行委員会を組織し、企画運営にあたる。

10、連絡先 亀岡敦子 T&F 045-561-2758



日吉の戦争遺跡ガイド養成講座
～戦争遺跡を歩いて平和の語り部になろう～

日吉台地下壕見学会参加者は年間約2000名、見学の希望が毎年増加し、多くの案内人が必要とされています。日吉台地下壕保存の会は戦争遺跡を案内する市民ボランティアガイドを養成するために、2005年から勉強会を実施しています。今年度は下記の日程で開講いたします。あなたも地域の歴史を伝える市民ボランティアガイドになりませんか？

- 第1回 1月16日(土) 「近代日本の戦争を問い直す」
「日吉の戦争遺跡の特徴とガイドの心得Ⅰ」
13:30～16:30 来往舎中会議室
- 第2回 2月6日(土) 「日吉の戦争遺跡を歩く(海軍連合艦隊司令部地下壕)」
10:00～12:30 来往舎前集合 懐中電灯・昼食持参
「日吉の戦争遺跡の特徴とガイドの心得Ⅱ」
13:30～15:30 来往舎大会議室
- 第3回 3月20日(土) 「戦争遺跡が市民に伝えるもの」 まとめ懇談
13:30～16:30 来往舎中会議室
- 定員： 30名（高校生以上） 参加費： 1500円（前3回分）
会場： 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎
申込先： ハガキ又はFAXで、①住所 ②氏名 ③連絡先（電話番号・FAX）をご記入の上、下記「ガイド養成講座係」へお申込下さい。
〆切 12月25日
横浜市港北区下田町2-1-33 喜田方 「ガイド養成講座係」
TEL&FAX 045-562-0443
- ☆☆地下壕見学ご希望の方は毎月の定例見学会にお申込ください

報告

◎第2回日吉をガイドする講座
「日吉台とその周辺の遺跡」に参加して

喜田 美登里

日吉台地下壕見学会の見学コースでは、連合艦隊司令部地下壕から地上に戻ると、当時軍令部の分室として使われたヴォーリズ設計のYMC Aチャペル前を通り、見晴らしの良い丘の道に出ます。ここから東に少し歩いて見学コースの最終ポイント、司令部として使われていた寄宿舎に向かいます。この道左側のフェンスの中に地下壕に通じる「耐弾式竪穴坑」の異様な姿があり、その脇に「弥生式竪穴住居址」の白い説明板が設置されています。慶應義塾予科校舎建設に伴い、昭和11年に三田史学会により確認された165個の住居址のうち5個を固めて永久保存したものです。ここで地下壕のガイドは、縄文からの遺跡に富む多摩丘陵末端の眺望と共にこの2つの「遺跡」について簡単な説明をしています。

私は見学会の案内はポイントのみの「戦争遺跡」だけでなく、自然を含めた地域の歴史を知り、紹介する事で見学される方の理解をより深められるのではないかと思っていますが、断片的な知識しかありませんし、弥生式住居址近くに移設されたという第六天古墳の石組みの行方とか色々知りたいこともあります。桜井先生のお話は楽しみにしていました。

桜井先生は、箕輪の艦政本部地下壕の調査、2001年に整備された連合艦隊司令部地下壕の

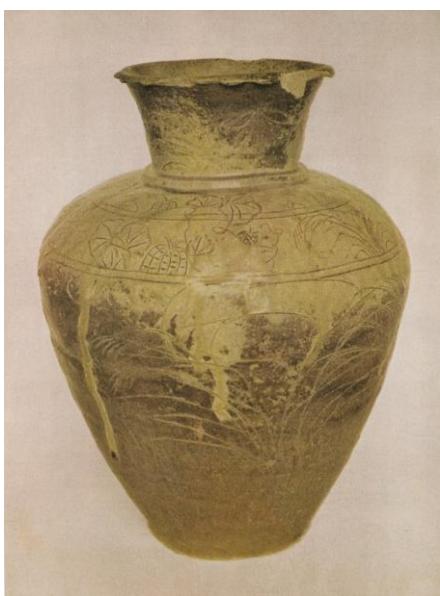


の加瀬山古墳群（夢見が崎公園）に向かって出発しました。2km以上の行程なので各自行ける所までという事になりました。

矢上小学校は神奈川県でも最大規模といわれた觀音松古墳の在った所です。完全に破壊されたといわれていましたが昨年、桜井先生達の調査で外郭の一部が発見され、そこから古墳の概要・規模などが推定できたそうです。学校を回りこんだ矢上川沿い道のアジサイの花が咲き乱れる中、その地点を案内していただきました。矢上川は工学部の丘を抱くように蛇行して流れます。古墳は交通に使われていた川の近くに威容を誇るように築かれていたそうです。白い石などで被覆されていたようです。川向こうにも加瀬山古墳群が見えたはずです。そう言えば、亀甲山古墳群も多摩川の傍ですね。橋を渡り、今は住宅地で個人のお庭に小さく盛り上がりが見える白山古墳、隣接していた第六天古墳を教えていただきました。この古墳には年齢の

異なる男性ばかり11体が俯きにかためて葬られていたそうです。傍らに剣もまとめて置かれていたといいます。何があったのでしょうか？時空を越えてミステリアスなものを感じますね。国宝の秋草文壺もこの付近から出土したそうです。

夢見が崎の丘を登り、川崎大空襲の慰靈塔に着いた時は一行は10人ぐらいになり、日吉に帰り着いたのは夕方でした。やっぱり実際に歩くと色々な事が実感できるものだと思います。スーツ姿でスマートに歩いていた桜井先生ありがとうございました。



国宝 秋草文壺（骨蔵器）
(平安時代末期)

排土調査などもされています。保存の会もお手伝いに参加しました。来往舎会議室で日吉台とその周辺の遺跡、その考古学的な位置づけについてお話をいただき、後半はフィールドワークに出発しました。新しく完成した独立館へ。ロビーには三田史学会が発掘した出土品が展示されています。エレベーターで上の階へ行き、日吉矢上古墳を遠望します。ここは重要文化財になっている竹の櫛などがでています。でも、ベランダの桟が邪魔でみんな苦労して眺めています。慶應大学はガイドさえいればキャンパス内だけでも充分に考古学散歩ができます。キャンパスを出て川崎



5-1-2 三角縁神獸鏡／加瀬白山古墳／慶應義塾大学文学部

三角縁神獸鏡(加瀬白山古墳)

◎第3回日吉をガイドする講座

慶應大学三田キャンパス歴史散策

谷藤基夫

【見学コース】演説館→万来舎・ノグチルーム→大銀杏→第一校舎→塾監局→図書館旧館→大ステンドグラス→展示室→文学の丘→福澤諭吉終焉の地→幻の門→平和来→還らざる学友の碑

講師：都倉武之氏（慶應大学福澤研究センター講師）

【日時】10月17日(日)午後1時～4時半

始めに「概略 福澤諭吉と慶應義塾」と題して慶應義塾の歴史の概要と福澤諭吉その人についての講演がありました。講師の都倉氏は本会会員で慶應日吉高校のころから日吉台地下壕を良く知る、今は新進の福澤研究者で、参加者のために懇切に諭吉の全体像を語って下さいました。氏のご尽力で普段非公開の演説館に入ることのできたこの日の参加者は幸運だったと思います。演説館演壇正面に飾られた着流しの着物を着た福澤諭吉の画像を前に聞く諭吉の全体像はその人となりを彷彿とさせるものでした。

自由民権運動のころ、この演説館で自由民権運動の思想家、活動家たちが盛んに演説を行った、まさにその場所にいることを思いました。演説の練習のために隅田川の川面に向かって練習までしたということです。後の言論弾圧の時代に横浜開港記念館などの演説会場に作

られる警察官の控室など、この演説館には無いといふことも質疑の中で明らかになりました。スピーチやディベート、可決、否決という言葉も諭吉によって広められたと聞いてまさに目からうろこの話でした。演説館公開の機会を多くして言論活発だった時代の息吹を是非今の若い人たちにも感じてもらいたいと思いました。

その後校舎の屋上にある万来舎・ノグチルームを見学、万来舎とは福澤時代の交流スペースの名称で今は谷口吉郎とイサム・ノグチのコラボレーションによる独特のモダニズム建築が空中芸術空間のように存在していました。旧藩邸時代から残る大銀杏の巨木の前から第一校舎、図書館旧館に入り、玄関正面の大ステンドグラスを見ました。鎧武者と学問の神の対比（文明と封建の出会い）を描いた「ペンは剣よりも強し」という慶應の校章を具現化するデザインと知り、感じ入るばかりでした。展示室でこの日のために展示された諭吉の遺品、三田の土地関係の資料を見て、質素で合理的な諭吉の生活ぶりをうかがうことができました。九人の子だくさんだったという諭吉が子供のためにアメリカから持ち帰ったおそらく日本で最初の乳母車が目を引きました。図書館横の文学の丘では久保田万太郎、佐藤春夫の句詩碑、小山内薫の胸像を見ることができ、三田文学の往時を偲ぶことができます。学徒出陣の学生たちが思いを残して義塾を後にした旧正門「幻の門」を見ながら福澤邸の跡地で諭吉終焉の様子を伺い、平和来、還らざる学友の碑の前で戦没者慰靈についてお話を聞き、日吉台地下壕を通して知る慶應についての見聞を更に広めることのできた思いでした。短い時間でしたが、三田のキャンパスにあって創立者福澤諭吉の全体像と慶應の歴史を垣間見ることができ貴重な時間を持つことができました。先達はあらまほしき事なりとか、名ガイドがいてこそその、充実した三田キャンパス歴史散策でした。ガイドに感謝しつつ、幻の門から三田キャンパスを後にしました。



図書館旧館



講師 都倉武之氏(演説館にて)

◎慶應義塾三田キャンパス歴史散策

水谷大二郎

10月17日、この時期としては、やゝ肌寒さを感じるなか、午後1時三田キャンパス演説館前に集合。この建物外観は寄棟瓦葺、海鼠壁、木造一部二階建土蔵造り、洋風の意匠は切妻屋根のついた玄関ポーチ辺りに見られる。建坪は87.8坪。内部は全くの洋式。ここで本日の講師、福澤研究センター専任講師都倉武之先生による、福澤諭吉および慶應義塾の歴史についての概略を伺う。また、若干の質問にも実に明快に説明して下さる。流石近代日本政治史がご専門なればこそか。

ついで散策に入り、初めに新萬来舎内のノグチ・ルームへ。イサム・ノグチと谷口吉郎とのコラボレーションによる独特のモダニズム建築のあらましを係の方から伺う。また、谷口氏が手掛けた幼稚舎本館を、そこで学ぶ幼稚舎生の視線から写した写真展が展示されており、微笑ましく拝見できた。

次いで、かつて大講堂の建っていた場所で、「東大の安田講堂、早稲田の大隈講堂に先駆けて、大学のシンボルとも言うべき大講堂がここに建っていたのです」と配布されたレジュメの写真を示し乍らの説明があった。小生も昭和16年、ここで入学式を行った想い出がよぎる一時であった。次に旧図書館へ。演説館と共に重要文化財に指定されている。創立150年記念切手でもお馴染みの大ステンドグラスもすっかり修復されCalamus Gladio Fortior(ペンは剣よりも強し)の文字も鮮やかである。展示室には都倉先生が、今日の我々の関心を誘いそうな品々を特に用意して下さったとのこと。また空襲で毀れた手古奈像の手首を見ると心が痛む。

旧図書館を出て北に向かうと文学の丘がある。ここに小山内馨の胸像と、久保田万太郎、佐藤春夫、吉野秀雄の三人の碑がある。この丘の東側坂付近に幻の門があったが今は移設され、三田通りに面して東館がその威容を誇っている。この建物に使用した赤煉瓦は今から100年近く前、旧図書館を建設した時使用した煉瓦を焼いた工場が現在も営業しているとのこと、その工場に特注して当時と同じ工法で仕上げたものを使用したこと、隣接されている旧図書館との違和感が全くない。

最後に塾監局前の平和來、還らざる学友の碑、更に南に進み、福澤諭吉終焉之地の碑を見学、大分予定時間をオーバーしたもようである。釣瓶落しの秋の暮れ、慌しくも有意義な一時、講師の方および運営の皆様に感謝しつつ家路についた。



1945年5月25日空襲で両腕を失った手古奈像
真間の里に「手古奈」という名の美少女がいた。
「真間の井」に水をくみに通う彼女の笑顔に、若者たちは魅せられ、争うように求婚した。手古奈は悩み、近くの入り江で入水する。

◎戦争遺跡見学会の資料紹介 (最終回)

新井揆博

会報 90・91 号の続編です

3 東京湾要塞観音崎砲台群



(観音崎砲台群遺跡の分布)

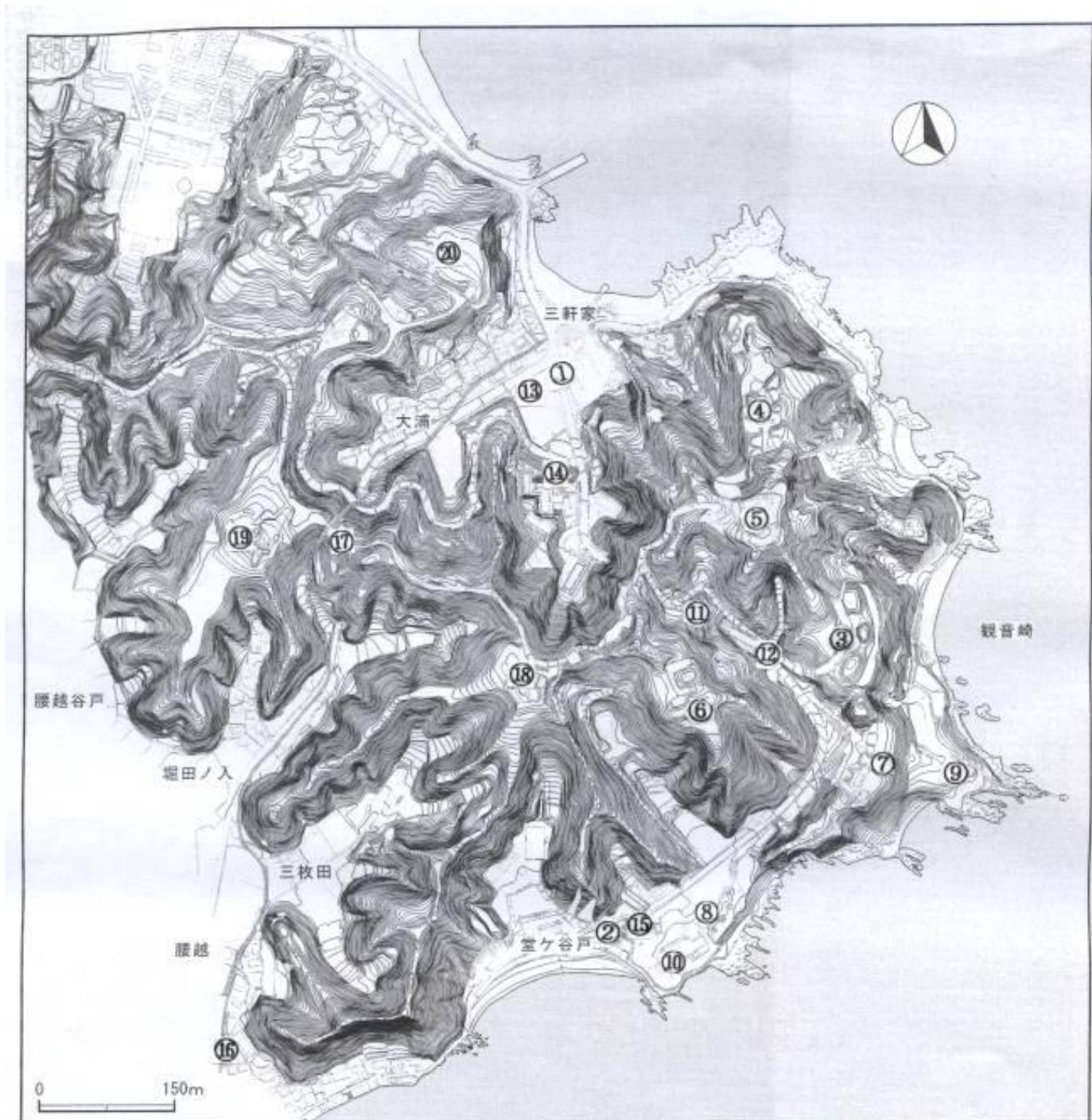
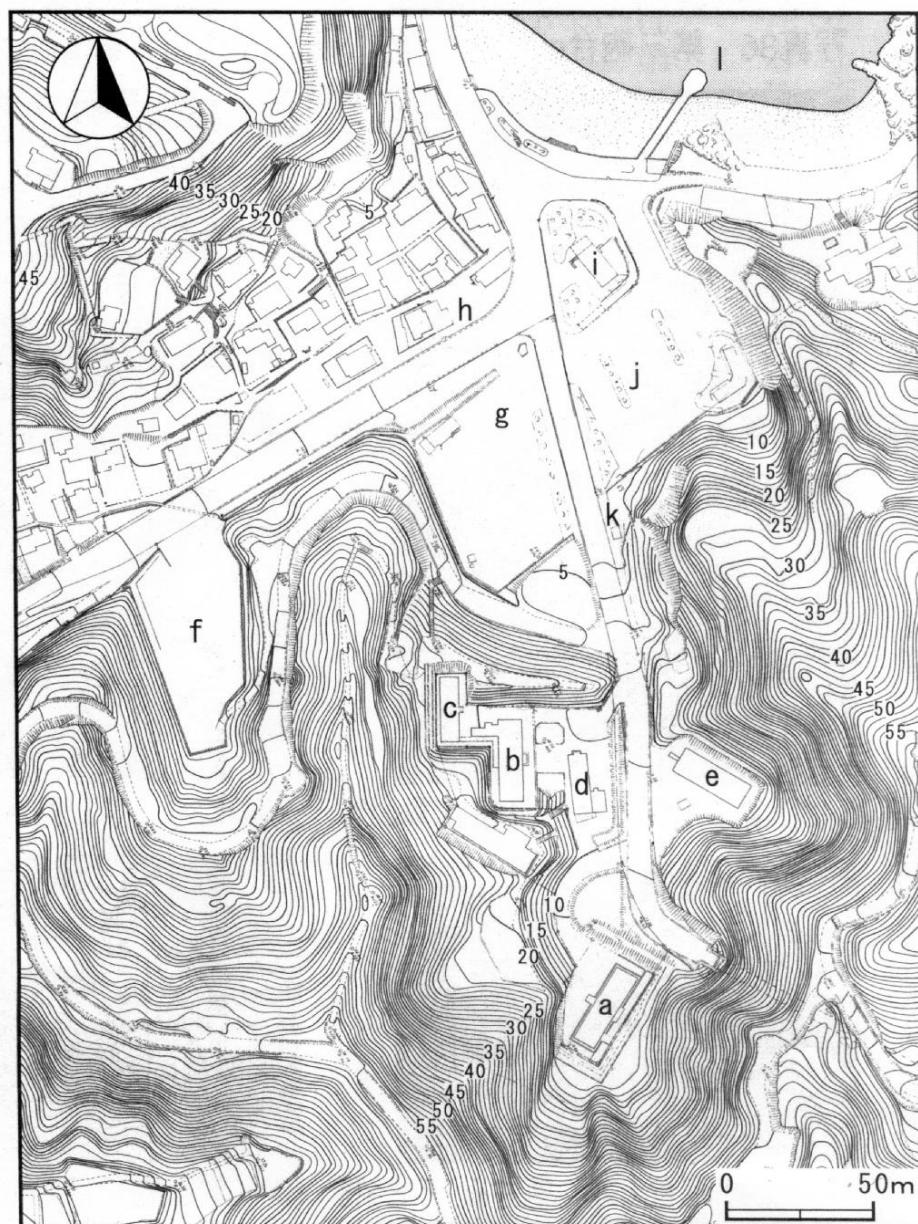


図1 観音崎砲台跡と周辺の関連遺構

『市史研究横須賀』第7号 より

- | | | | |
|------------|------------|-------------|-----------|
| ① 観音崎砲台北門 | ② 観音崎砲台南門 | ③ 観音崎第一砲台 | ④ 観音崎第二砲台 |
| ⑤ 観音崎旧第三砲台 | ⑥ 観音崎第三砲台 | ⑦ 観音崎第四砲台 | ⑧ 観音崎南門砲台 |
| ⑨ 観音崎電燈所 | ⑩ 観音崎南門電燈所 | ⑪ 隧道 | ⑫ 五叉路 |
| ⑭ 土壠(北門谷) | ⑮ 土壠(南門) | ⑯ 三軒家-腰越間旧道 | ⑰ 切道・めがね橋 |
| ⑱ 大浦堡壘 | ⑲ 腰越堡壘 | ⑳ 三軒家砲台 | |

(北門谷建造物の分布)



『市史研究横須賀』第7号 より

- | | | | | |
|-----------|------------|-----------------|---------|---------|
| a 火薬本庫 | b 第二火薬本庫 | C 火具庫 | d 弹薬調整所 | e 第三火薬庫 |
| f 第四火薬庫 | g 官舎と油庫 | h 陸軍第七研究所北実験所施設 | i 艇庫 | |
| j 衛兵所と附属家 | k 弹丸庫が四棟と廁 | l 繫船場 | | |



現在青少年の村に残る火薬本庫。

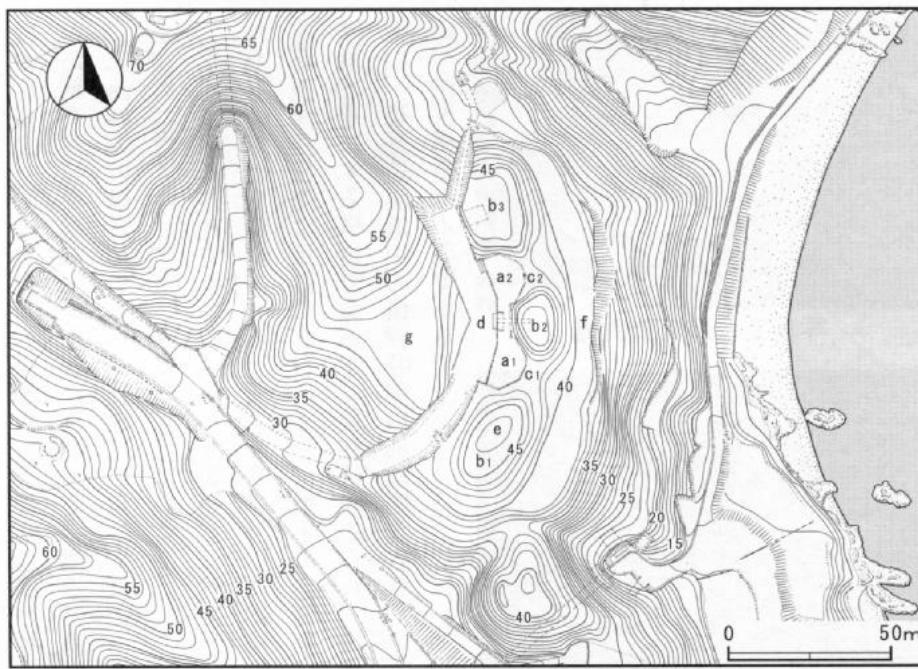


第二火薬本庫。



第二火薬本庫の土台部分。

(第一砲台)



『市史研究横須賀』第7号より

a 1・a 2 二砲座。
b 1 南側横牆(おうしよう)・その上に観測所(e)があり側遠器基礎が残存する。

b 2 中央横牆・その下には砲側庫が存在・両砲座を連絡する煉瓦造隧道中に揚弾井の開口部二ヶ所存在する。

b 3 北側横牆・中に掩蔽(えんぺい)部が存在。

C 胸牆。

d 墓道。

第一砲台は1880(明治13)年6月起工。1884(明治17)年6月竣工。二門構成露天砲台、1894(明治27)年9月24cmカノン砲二門を設置、日清戦争の戦備について。1915(大正4)年除籍。第一砲台は、北門第二砲台とともに、わが国洋式砲台の嚆矢である。



南側から見た第一砲台。



中央横牆。中央横牆の下に砲側庫の存在が見える。



大砲について・・・観音崎砲台に設置されていたのはカノン砲・速射カノン砲・榴弾砲・臼砲などであった。

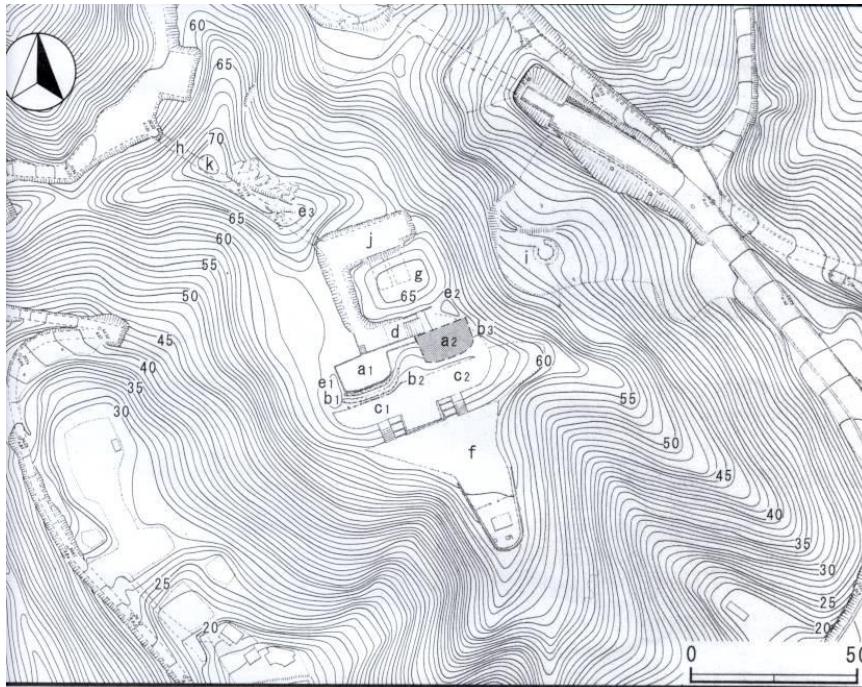
カノン砲(加農砲)=相対的に砲身が長く砲弾の初速が大きく、榴弾砲より遠くまで届く。

速射カノン砲=発射速度が大きく、一定時間内に多数発射できた。

榴弾砲=カノン砲に比べ砲身が短く上向きに発射し頭上から敵艦の甲板を打ち抜くことに適す。

臼砲=臼は「うす」のような形をしていたことに由来、榴弾砲よりさらに砲身が短く、比較的近距離の敵の頭上から弾丸を落とすことができた。

(第三砲台)



揚弾井が開口している。観測所（e）として考えられる遺構は東西の横牆上、隧道上丘陵の三ヶ所に存在する。

第三砲台は、一砲座に二門備えた四門編成の砲台、1882（明治15）年8月9日起工、84年6月27日竣工。9月22日、28cm榴弾砲四門据付け完了。1922（大正11）年4月26日の地震と翌年、23年9月1日の関東大地震の被害甚大により25年7月2日除籍。



第三砲台第1砲座。



東側から中央横牆を見る。隧道を抜けた部分にある掩蔽壕。

『市史研究横須賀』第7号より
隧道（h）を抜けると墨道（d）にいたる。墨道の東側には露天掘り空間（j）が存在し、矩形に掘り出された土地（g）で区界されている。その南側に横牆（おうしょう）（b）及び胸牆（きょうしょう）（c）で区画された二砲座（a）が配されている。

第一砲座（a1）は良好に残存、横牆・胸牆の内壁は、ぎ灰質礫岩によるブラフ積み擁壁で、アーチ構造の弾室が設置されている。第二砲座（a2）は欠落している。中央横牆（b2）下の砲側庫が存在し、両砲座を連絡する高墨道に面して

第三砲台第1砲座。



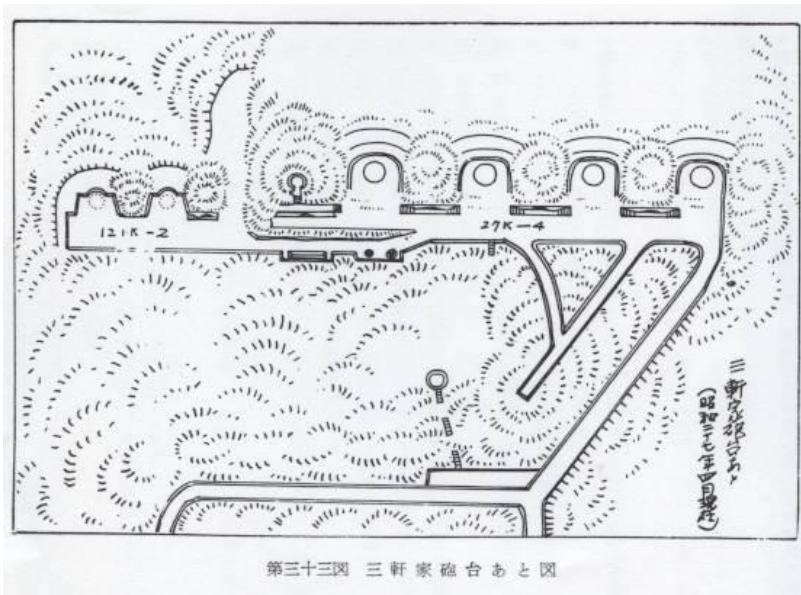
(大浦堡墨砲台)

現在の戦没船員の碑あたりに、1895（明治28）年5月起工、86年7月に竣工したという。1902（明治35）年3月、車両式9cmカノン砲二門が据付けられた。設置の目的は腰越堡墨砲台と同じく観音崎諸砲台の背面防備である。1925（大正14）年7月除籍された。

(腰越堡墨砲台)

現在、「うみの子とりで」遊園地に土墨が残る。1894（明治27）年、日清戦争中観音崎砲台背後にあって陸正面より進行する敵の防備として設置した。戦後これを堡墨砲台として本格的に改造し、96年3月竣工、97年3月9cmカノン砲二門を配備完了した。土墨の上に歩兵の陣地を備えていたが、1925（大正14）年7月2日除籍された。

(三軒家砲台)



の砲座の背後の山が掘り割られその奥に二つの掩蔽部が設けられている。

27cmカノン砲台は1894(明治27)年12月15日起工、96年12月20日竣工。12cm速射カノン砲は1895(明治28)年4月9日起工、96年3月31日竣工。

1923(大正12)年9月1日、関東大地震により大きな被害をこうむる。27年7月6日復旧工事完成。33年6月10日12cm速射カノン砲二門撤去。34年27cmカノン砲四門撤去、8月20日三軒家砲台は除籍された。



27cm カノン砲砲座。



砲座間背後の掩蔽部。



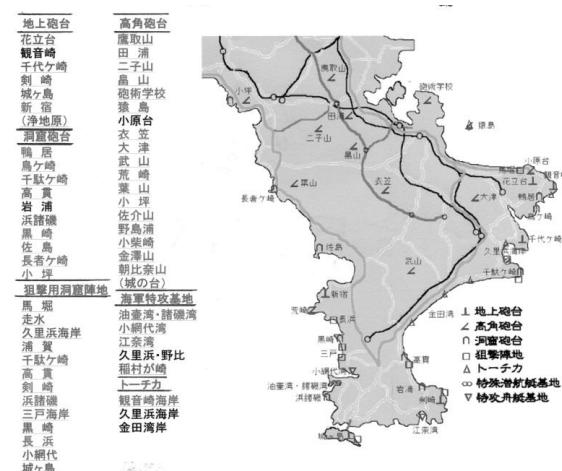
觀測所跡。

4 アジア太平洋戦争末期三浦半島防衛体制の変化

東京湾要塞図。
明治以降東京湾口には多数の砲台が築城さ
れていた



三浦半島のアジア太平洋戦争末期の防衛体制



5 戦没船員の慰靈碑



戦没船員の慰靈碑

十五年戦争／鎮魂・慰靈

戦没船員の慰靈碑

—軍人の死亡率をはるかに上回った船員六万余人の戦没者

太平洋戦争において軍人の死亡率を上回る死亡率を示したのが船乗りだつた。その戦没船員の碑は、眼下に大小の船舶が往来する浦賀水道を見下ろす横須賀市観音崎公園丘の上にある。

広い敷地に、白磁の大碑壁（高さ二四メートル）、ブロンズ群像などで構成されている。黒御影石の碑には「安らかにねむれ　わがともよ　波静かなれ」とこしえに」と記されている。納められた名簿の数は六万六〇八人。

アジア太平洋戦争で、日本の海運・水産界は六万余人に及ぶ尊い船員の生命と二五〇〇隻、八四〇万総トンを越える船舶を失った。海底に眠る戦没船員の靈を慰めるとともに、世界の海に二度と戦火の起こらぬことを祈念するため、一九六九年、海運・水産界の関係者によって財團法人戦没船員の碑建立会が発足、七一年三月に完成した。

戦没した船員たちは軍人ではなく、軍に船もろとも徴用されて兵員や物資

輸送に従事させられた民間の商船や貨物船・機帆船などの乗組員であった。

戦時中、日本の輸送船は日本近海から太平洋、東シナ海、南シナ海、印度洋にかけての広大な海域を航行したが、とくに戦争末期には次々と米軍の潜水艦に攻撃され、多くの船舶とともに船員が海底に沈んでいった。その死亡率は四七%、陸軍の約二〇%、海軍の約一六%と比べても驚くべき高さである。遠くソロモン諸島まで伸びた兵站線がいかに危険にさらされていたかがわかる。

また船員死亡者の中で二〇歳未満の年少船員が一万九千余人（三一%余）を占める。さらに戦没船員の中には朝鮮出身者二六一四人、台湾出身者一〇一九人が含まれていることを忘れてはならない。

（新井権博）

101

教育者協議会編『石碑と銅像で読む近代日本の戦争』高文研 より



戦没船員慰靈碑がある園地。



碑には「安らかに…」と。



戦没者船員のブロンズ像。

投稿

(この感想文は、筆者が今夏8月1日の見学会に参加し書かれ、横浜市立もえぎ野中学校第二学年の学年だより「ある日ある時ⅡN027」に掲載されたものです。本人の了解を得て転載させていただきました。)

日吉台海軍地下壕見学感想集 過去の出来事と現代社会をつなぎあわす

1組 中川真人

夏休み、僕は日吉にある連合艦隊司令部の地下壕を見学し、講師の先生による当時の話を聞いた。

「沈みかけて暗号を使わなくなつた大和の無線をただ聞くしかできなかつた・・・返信は出来なかつた・・・。」講師の先生の言葉が今でもこころに焼きついている。

現代は大量の情報をリアルタイムでやりとりできる。しかし、当時は、海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊の受信所が受信したわずかな報告から戦局がきびしくなつて行く現場を想像し、通信を聞き続けることしかできなかつた。通信を受けることしかできなかつた日吉の連合艦隊司令部の人はとてもつらかったと思う。また、それ以上に負けの見えている戦場で死ぬまで戦い続けた兵士たちはつらかったと思う。説明を聞き、通信の送り手と受け手となった人びとのことを想像しただけで、僕は胸がはりさけそうになつた。僕自身が体験したことではないのに、つらかった。

階級が上の軍人はする。階級の低い兵士たちには「特攻しろ」「自決しろ」「お国のために生きて帰るな」と言い、自分たちは安全な所から命令する。ひどいことだと思った。1944年、サイパン島が落とされ、本土空襲が予測されると真っ先に日吉に退避壕がつくれられ、そこから次々にこの地下壕が作られていったという。壁の厚さは40cmのコンクリート、全長およそ2600m。苦しい戦場や貧しい市民の生活からは考えられない量の物資がうかがえる。物のあるところとないところの差が激しいと思った。

「戦争は究極の格差社会」講師の先生の言葉だ。確かにそう思う。安全なところからの作戦司令で戦場の兵士は死ぬ。「そんなのないよ」と訴える人はいなかつただろう。そのことを知った多くの人は、戦死しているだろうし、一般市民がそんなことを言つたらつかまつてしまう。偉い人がそうでない人を押しつぶす。ぼくはそんなことに納得できない。当時は生きることも死ぬことも誰一人納得していた人なんていなかつただろうと思う。

見学が終わつたあと、いろいろな質問をした。「昔の戦争をなぜ勉強するのか」「それは例えば、『兵士は使い捨てか』と『派遣社員は使い捨てか』のように昔も今も人間社会に通じることがあるからだ。」と先生は言った。そして「世の中を動かすのは想像力、これからは情報の選択力も重要」とのことだった。たしかに今世界中で過去とよく似た戦争が起つてゐる。歴史はくり返すと言う。しかし戦争だけはもう二度としてはいけないと思った。

戦争を過去の一つの出来事として、切り取るのではなく現代社会につなげて考えるということを知り、とても勉強になつた。

企画

地下壕ガイドから一言

長谷川 崇

早いもので新米ガイドも2年を経過することが出来そうです。養成講座を受講して立派な終了証を大西会長より戴きましたが（30年ぶりの賞状）果たして本当に出来るのか、全く不安の中からスタートしました。昨年実績（45回、見学者1920名）今年（10月31日まで41回、1856名）の多くの方々に接してガイドをしてきました。自分ながら何とか出来た様に（自分勝手な判断で）おもいます。しかし戦争の歴史の多くの事柄を再認識すること



ガイドをする長谷川氏

は容易ではなく地下壕についてもまだまだ不十分な事が多く此れからも先輩方の指導を頂き説明不足に成らない様毎回ガイドの中で考えています。私自身地元に40数年暮らしていますが、この間地下壕を見た事が無く最近になって自由な身となり、微力ながら行動に取り組んで行くべく、保存と活用についてこれからもガイドに専念する所存です。人は移り代わりがありますが地下壕は無言のままの生き証人であり多くの人々に知ってもらい見学会の勧誘にも進んで行い今年友人、知人、地元の人々を20数名にも参加してもらい戦争遺跡の認識を確かめて頂く様今後も続けてまいります。

なお皆様の中で私たちと一緒に活動できる方が居られましたら大変嬉しく思いますので宜しくお願いをいたします。

新刊紹介

『須田輪太郎が語る「ひとみ座」人形劇の60年』

亀岡 敦子

「ひよっこりひょうたん島」でおなじみの人形劇団ひとみ座の元代表須田輪太郎さんが、『須田輪太郎が語る「ひとみ座」人形劇の60年』(刊行委員会・編)を出版しました。須田さんは、日吉台地下壕とも登戸研究所とも、その活動の初期の頃から関わりをもっていました。そのまま「川崎・横浜平和のための戦争展」にも最初から実行委員となり、川崎開催年には代表を何



須田輪太郎氏



須田氏と『乙女文楽』

度もつとめ、川崎市との架け橋となってくれました。そんな中、実行委員の有志が、須田さんから5回にわたり聞き取りをし、それを一冊の本にまとめました。幼少期から蒲田での空襲体験、国鉄の職場演劇からの演劇人としての出発、ひとみ座在籍60年の人形劇とのかかわりなど、多岐にわたり語ったものです。これは81歳の須田さんの個人史をこえて、日本のこども文化史であり、神奈川の地域文化史であり、戦後社会史としても大変興味深い本です。

ひょうたん島オリジナル版をみた世代も、リメイク版ではじめて知った世代も、なぜひょうたん島があんなに人びとをひきつけたのか、納得できることが沢山書かれています。そしてひょうたん島のように「違いを認め合う」社会こそが、真に民主的な社会なのだと、だから登場人物がみな生きいきと魅力的なのだと、分かることです。写真が多くて読みやすくて、本の中からあのテーマソングが流れてきそうな、そんな気がしてきます。



☆活動の記録 (2009年9月～11月)

- 9/15 運営委員会 会報93号発送 (慶應高校物理教室)
 9/17 地下壕見学会 日吉台小学校6年生122名 先生4名
 9/23 地下壕ガイド学習会 (菊名フラット)
 9/26 定例見学会 49名
 9/27 横浜大空襲を記録する会との合同研究会 (菊名フラット)
 10/5 地下壕見学会 板橋生活者ネットワーク24名
 10/10 ヒヨシフェスタ参加
 展示・書籍販売 運営委員10名
 (ヒヨシエイジ主催 慶應日吉キャンパス)
 10/14 平和のための戦争展実行委員会
 (法政第二高校教育研究所)
 10/16 運営委員会 (慶應高校物理教室)
 10/17 第3回日吉をガイドする講座《慶應大学三田キャンパス歴史散策》25名
 講師 都倉武之さん (福澤研究センター専任講師)
 10/19 地下壕見学会 久が原探史会 27名
 10/22 地下壕見学会 ヘルスマイト・ローズの会 16名
 10/24 定例見学会 51名
 10/25 戦争と人権を考えるバスツアー
 《多摩丘陵の戦争遺跡を訪ねる》32名
 (調布飛行場掩体壕・国立ハンセン病資料館・
 日立航空機立川発動機製作所変電所跡)



ヒヨシエイジ

- 10/29 地下壕見学会 神奈川県立大師高校 1年生9名
 先生2名
 川崎市退職教職員連絡会 21名
 10/30 発掘調査中の軍令部・航空本部等の見学 安藤広道先生 運営委員7名
 (3A 前面のスロープが出土、調査中)
 11/3 地下壕ガイド学習会 (菊名フラット)
 予定



県立大師高校

11/6 運営委員会 会報94号発送 (慶應高校物理教室)

☆☆定例見学会(土曜日 13:00～) 12/19・1/23・2/27

○会報93号記事の訂正 9ページ登戸研究所資料館内覧会日時

(正) 2009年11月22・23日 (2日間の学園祭実施時間内は見学可です)

(誤) 2009年11月28日

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/> (新アドレス)

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会